

松山高商(松山大学)
創立の貢献者

新田 長次郎 翁

元四国郵政研修所長
伊予史談会会員
山崎 善啓

一、新田長次郎の年譜

安政4 (1857)
明治10
21 20 18 15 13
温泉郡山西村(現松山市山西町)に生まれる
無断で家出し上阪する
米穀商に従事するが五カ月で退職、藤田組製革所に入所
藤田組退職
大倉組製革所に入所
独立して製革工場を創業
匿名組合新田組を結成
初めてベルトを製造

26 31 33 35 36 41 44

第一回海外視察(36歳)パ
リで加藤恒忠と会う
各地海軍工廠のベルト納入
業者となる
第二回海外視察
緑綬褒章を受章
国学院顧問に就任
合資会社新田帯革製造所発
足
北海道進出、十勝工場落成
固形タンニンエキスを製造開
始
大阪に私立有隣尋常小学校
設立、費用全額負担



新田 長次郎 翁

二、生い立ち

安政四年五月、長次郎は山西村で農家の二男として生まれた。将軍家定の時代で、幕末の風雲はまだ見えなかった。慶応四年六月、十一歳のとき、第二次長州征伐があった。

その戦いの後遺症で、夏頃には長州兵が松山へ攻めてくるとの噂で、山西村にも藩兵がやってきて駐留した。長次郎の周辺も騒がしい日々が続いていた。

長次郎は九歳で寺子屋に通い始めたが、農作業を手伝うため十二歳でやめた。その後十五歳で算盤のけいこを始めたが、その才能が近所の評判になっていた。農作業の合間には農産物の行商にも出かけた。

明治十年二十歳のとき、これから一人立ちしてわが道を開こうと決意し、家族に無断で大阪へ出ることにした。同年五月二十八日、松山の家を出た長次郎は必死で歩いた。いつか大望成

大正8
11
12
昭和11・7・17
合資会社新田ベニヤ製造所設立
有隣尋常小学校、市に移管
松山市長加藤恒忠、新田長次郎に松山高商設立資金提供を申出、快諾
松山高商商業学校設立
建設資金四十二万円寄付
死去、八十歳

三、製革業に就職

就し錦をかざって帰郷する日まで頑張るぞ」と心中でつぶやきながら歩き続け、三十日には琴平に着き、旧知の友人宅で休養の後大阪へ向かった。

大阪へ着いた長次郎は、頼りにしていた人に仕事を紹介してもらえず、逆に田舎へ帰れと言われた。渡る世間の非情を思い知らされた。しかし、縁あって米屋に就職し熱心に働いたが、家族と折り合いが悪く五カ月で退職した。

明治十年西南戦争の最中、藤田組製革所が開業した。その頃米屋を退職していた長次郎は、新しい洋式製革の仕事に興味を持ち、藤田組に就職した。これが長次郎と製革業との出会いであった。

技術習得の強い意欲を持っていた長次郎は、約二年で製革技術の概要を修得した。

明治十三年、藤田組は経営不振から事業縮小することとなりやむを得ず退職した。長次郎はしばらく定職を持たなかった。仕方なく灸術師の見習いになった。

明治十五年、関東の大倉組が大阪に進出して、大倉組製革所

が設立された。同所が製革技術者を探しているとき、長次郎は勧められて入所し再び製革業に携わることになった。

大倉組ではその技術を認められ作業主任を命ぜられ、一層技術を磨くことができた。さらに長次郎は大阪製革会社に技術研修のため出向を命ぜられた。この会社は民需用製革であり、不良品を出さない工程ときめ細かい仕上げ方法を学んだ。ここでは彼は自ら完成した製品を東京の革問屋に送ったところ、「これは日本一、否東洋一の優等品なり」と高い評価を受けた。

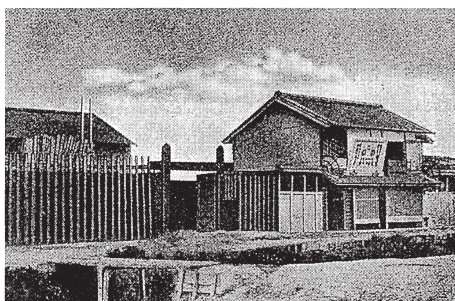
その後、社内の人間関係がまぶくなつたのをきっかけに、独立しようと決意し大倉組を退職した。

技術的に実力をつけたとはいへ長次郎飛躍の一大決心であった。ときに二十八歳であった。

四、風雪を克服し独立創業

明治十七年十二月、長次郎は難波村(現浪速区)に一軒の空家を借りて開業準備に入り、翌年三月十八日作業を開始した。創業当初は靴用の製革であったが、二十一年には革ベルトの製造に着手した。当時革ベルトはすべて輸入品であった。長次郎

製造のベルトは、わが国最初のベルトであり、輸入品に劣らない製品であったから、多くの紡績会社で採用されることになった。長次郎は二十年には三人の事業協力者を得て出資を受け、匿名組合新田組を設立した。この資金で工場を新築し経営基盤を固めた。さらに妻ツルの兄、井上利三郎が全面的に協力してくれ安心して任せることもできた。



創業時の建物

五、海外視察

革製品を独自に創意開発した長次郎はさらなる技術革新と新製品開発のため、海外の先進地を視察したいと希望を抱いた。ちょうど明治二十六年(一八九三)シカゴで、世界大博覧会が

開催されることを知り、博覧会見学をかねて海外視察することにした。

この視察は、横浜出港後、アメリカのサンフランシスコに上陸しシカゴ・ニューヨークを経てイギリスに渡り、ロンドン・パリなどの視察を終えてマルセイユで日本行きの船に乗り帰国するという約七カ月の長い旅行であった。

ロンドンでは三井物産支店長の案内で製革機械製造工場を視察し必要な機械も購入した。パリでは日本大使館を訪ね、代理公使加藤恒忠に会った。会話の中で、加藤は長次郎が松山出身であると知って、自分も松山出身であると述べて急速に親しくなった。加藤は長次郎のため何かと便宜を与え、帰国後親友として固い交わりを結ぶようになった。

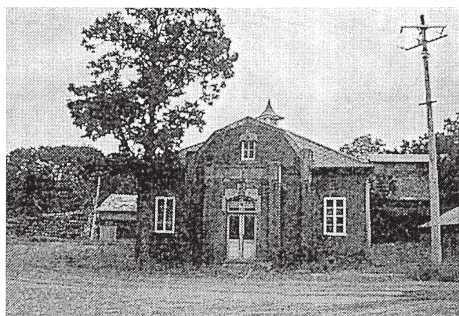
横浜を出たのは五月で、神戸に帰り着いたのは十一月になっていた。この旅行にはおそらく五千円はかかっていたと思われる。しかし、三井物産と新たな関係ができたこと、英国の最新機械を購入し生産力と品質を向上させたことなど大きな成果を得た。

長次郎は明治三十三年五月、二度目の海外視察に出かけた。

今回はパリで大博覧会が開催されており、自社製品も出展していたので世界の製革品見物もかねて、まずパリへ出かけアメリカ経由で帰国した。この旅行では大倉組の大倉喜八郎と同宿し、同業の先輩として学ぶべき点が多かった。

六、北海道進出

明治時代に導入された洋式製革法はタンニンで皮をなめす方法であった。このタンニンは樹皮から出る渋を使用していた。木の中でも柏の樹皮に良質のタンニンが含まれていた。そこで長次郎は北海道十勝の柏樹林三千六百町歩を買収した。樹林を伐採した跡は牧場として経営し、樹木はベニヤ(合板)の製造に取り組んだ。



北海道工場事務所跡

明治四十四年には十勝製鉄工場が設立され、固形タンニンエキス製造を開始した。その後工場は順次拡大、六万坪の敷地に十棟の工場と十五棟の倉庫に二十棟の社宅が並ぶようになった。

七、軍の要請にこたえる

明治三十一年、呉海軍工廠から新田組にベルトの指名契約納入業者に指名された。呉に続いて他の海軍工廠からも次々と指名してきた。工廠ではベルトの需要が多く、従来輸入品を使っていたが、輸入ではいざという時の供給に不安があるため、輸入品以上の品質が保証される新田組を指名したのである。新田組は各地の海軍工廠の指名を受けて、順調に生産規模を拡大していった。

三十七年、日露戦争が始まった。長次郎は戦争への協力を考えた。まず自宅を開放し、大阪港から出港する部隊の将校用宿泊所として提供した。旭川第七師団が宿泊した際、「私の工場でするものがあれば言ってほしい」と申し出たところ、「鉄条網を切る鋏がでないか」とのことであった。長次郎は直ちに従業員を指揮して鋏を考案し、握りにゴムを巻き絶縁処理

をした鋏を作り提供した。後にこの鋏は奉天会戦の際、敵の鉄条網切断に成功、作戦遂行に役立ったと連絡があった。その後同師団から百六十丁、大阪第四師団から百八十丁、弘前第八師団から二百丁の注文が届いた。

この頃、長次郎は呉海軍工廠に向いた。高速度網切断機用のベルトを製造してほしいとの要請であった。長次郎は研究を重ね強化ベルト製造に成功した。このベルトで切断機は使用可能になり、造船・修理に大いに貢献した。

八、社会の評価と学校設立

ベルト製造を中核にタンニン・牧場・ベニヤなどの事業が拡大していく中で、世間の長次郎に対する期待や評価もあがっていった。

この頃、新田帯革製造所の地球印革製ベルトは市場を征服し、長次郎は「東洋の調革王」と称されるまでになっていた。

三十五年、政府は褒賞条例による大阪府下の第一回表彰として十名の実業家を選出、緑綬褒章を授与した。長次郎はその一人に選ばれ、榮譽ある場に招かれ公に評価された。長次郎にとっては思わぬ嬉しい出来事であった。

あった。

さらに翌三十六年、国学院は各業界から五名を選出、顧問に推挙した。それは横山健（国学者）・松平正直（男爵政治家）・高橋是清（子爵日銀副総裁）・本間光好（農業者）の各人に新田長次郎（工業家）であった。

この報が届いた時、長次郎はあまりの格式の違いに辞退をしようと友人に相談すると、大阪実業界代表として受けよと説得されて受諾した。

顧問を引き受けると、校舎改築について相談があり、五千元を寄付、加えて銀行より国学院に対する融資四万円の保証人となった。

佐々木院長はそれらの労に報いるため、長次郎を高輪御殿に案内した。佐々木高行は元土佐藩士で幕末に国事に奔走した。

維新後は新政府に勤めたが、十八年には宮中顧問官として明治天皇の側近となっていた。従って皇室に近い立場にあった。このような立場で、佐々木院長は長次郎を連れて皇族への拝謁を許した。宮様からお言葉や記念品を下賜されることもあった。

四十三年、大阪で第五回勸業博覧会があった。旧松山藩主久松勝成は、博覧会見学をかねて

新田組の工場と作業工程を視察した。久松伯爵は「新田君は松山の誇りなり」と言った。長次郎は感激した。

四十四年、長次郎は難波警察署長の依頼で、同署管内に住む貧困家庭で義務教育が受けられない子供たちに学ぶ場を設けられなかったのかと相談を受けた。

長次郎は早速賛同し民家三軒を借りて、夜間の私立有隣尋常小学校を設立、教職員の給与から児童の学用品に至るまですべての費用を負担した。

大正九年には校舎を改築、夜間と昼間の二部制に拡張、通学児童は三百五十名にもなった。大正十一年になり、大阪市から公立の勤労小学校にしたいと申し出があり、大阪市に移管した。

話はさかのぼるが、長次郎は北海道でもいくつかの小学校を設立して地元へ寄付していた。ところがこれが自社の労働力確保のためだと言われて困惑したことがある。

九、松山高等商業学校創立

大正十一年（一九二二）五月、加藤恒忠は第五代松山市長に就任した。就任直後の課題として松山に高等商業学校の新設があ

った。新設に伴う所要経費は約十五万円、その半額は県が出資を約束してくれたが、残りの七八万円をどうするかで悩んだ加藤は、新田長次郎に依頼しようとして上阪した。

長次郎は、かつて海外視察の際パリでお世話になっており、旧知の間柄でもあったので、快く申し出を引き受けた。加藤は一件落着と大喜びで長次郎に感謝し帰松した。

ところが思いがけぬ事件が発生した。県が中央の緊縮財政に関連して、先に約束した半額補助を断ってきた。さらに追い打ちをかけるように、文部省から高商設立に際し基本金三十万円積立の指示があった。

加藤は困り果てて、計画の中止しかあるまいと心に決め、事情報告に長次郎を訪ねた。説明を聞いた長次郎は「それでは追加分も含め全額出しましょう」とあっさり引き受けてくれた。驚く加藤に長次郎は「金を出す、ただし学校創設には条件があるよ」それは

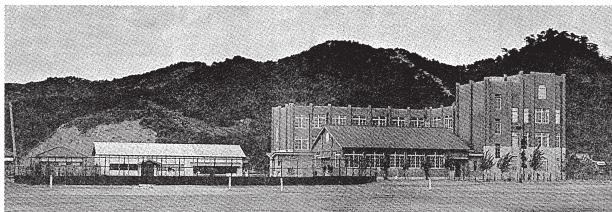
一、新田長次郎は、学校運営には一切かわらない
一、新田長次郎の関連会社は、卒業生を採用しない
というものであった。

この条件を見た加藤は「最初は分かりますが、二番目はどういう意味ですか」と尋ねた。長次郎は「高等商業に入れば同時に新田の会社に入れるとなれば、就職口が一つ確保できたと思ひ、学生は安易に流れる。また、自社社員の養成所であつては、個人色が強過ぎて社会事業とも言えず、学校の発展もあり得ない。それを防ぐには卒業生を採用しないことで私的な関係は断ち切った方がよい」と答えた。

加藤は長次郎の意見に賛同した。長次郎の負担した金額は、同校寄附行為によれば次のとおり。

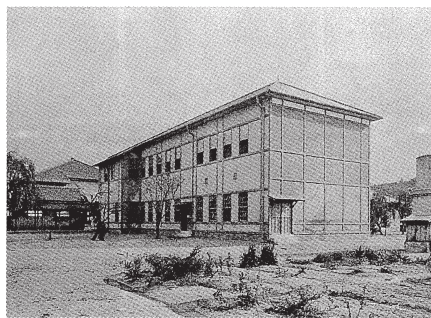
一創立費トシテ現金拾貳万円也
二基本財産トシテ大阪市南区木津川町地坪参千参百拾九坪
但シ此ノ地価参拾万円ニシテ
収益年額壹万五千元ノ見込
三第一回海外留学生費トシテ金参万円也
第二回以後ハ随時寄附ヲ為ス
(大正十一年十一月認可)

十二年三月三日第一回の理事会を開き、校長に北予中学校長加藤彰廉を選んだ。校舎は差し向き北予中学校の二階三室を仮



新築当時の高商校舎

残念なことは松山市長加藤恒忠は開校を目前にして三月二十六日食道癌で他界した。享年六十五歳。大正十三年十月十日、松山高商では松山で最初という鉄筋コンクリートの



開校時の仮校舎（2階の3室）

校舎として四月二十五日開校した。わが国三番目の私立高等学校であった。専任教員六人、生徒五十六人であった。

新校舎が完成し、開校式が行われた。式には文部大臣代理・県知事・松山市長はじめ二百数十人が参列した。加藤校長は設立から校舎完成までの経緯を読みあげ、新田長次郎(温山)氏の莫大な資金提供・故加藤市長の功労に謝辞を述べた。

新校舎は三階建(塔屋四階)、二十三室延六百五十二坪であつた。開校式に続いて、二日間校舎を一般に公開した。祝賀行事として統計展・ポスター展・地方物産展・野球大会・弁論大会・音楽会などが開かれ、はなやかな催しで学内は喜びの声があふれていた。

十、長次郎の変わらぬ援助

大正九年、第三代校長に就任した田中忠夫は、上阪して長次郎に就任あいさつをした。田中は非常に歓待を受け、経費についても「予算外に使う金で一万円までなら一々説明はいりません、使っておいて後で請求してくれば結構です」といわれた。田中校長就任の翌年(大正十年)、校舎の拡充構想を固めて上阪、長次郎に相談した。長次郎は「私は計画してから三年は胸の中で暖めるのがモットーでしてね」といわれた。田中は長次



新講堂落成を祝して新田翁よりの書

郎が「田中さん、あせりなさんな、先は長い、じっくり腰を落ちつけてやることですよ」と自分の処世訓に託して若い校長に助言してくれたのだと思った。その後、拡充計画を進めるに当たって、長次郎はいつも積極的に応援し、多額の寄付にも快く応じてくれ、終始変わらぬ学校への援助を惜しまなかった。昭和三年、新講堂新築に際しても多額の寄付をし、その落成を祝して書を送ってきた。学校では昭和十一年、教職員の退職金規定を制定したが、十八年には新田家から十万円の手付けを得て恩給制度が確立された。

さらに新田翁は昭和十一年四月、学校の校長以下教職員全員を和歌山の新田家別荘に招き歓迎した。教職員たちは新田翁夫妻の心あたたまる歓待に感激の一夜を過ごした。

十一、晩年の長次郎

長次郎は、学問の洗礼を受けていない。その知識や行動は現場から学んだものを自分なりに判断し、咀嚼して、試行錯誤しながら方針を定めていったものである。したがって高邁な思想や理論があったわけではなく、常に常識的に判断し行動していた。

従業員が増えてきた明治末期頃からは、懇談会という月例会を開いた。事務所・工場それぞれの部門で生産性・品質向上のための研究を発表させ、長次郎自身も講話を行った。その中で「発明・改良・円満」を繰り返して説いた。

また、長次郎は火事場泥棒的に暴利を得ることを好まず、「安く仕入れたものは安く売る」方針で普通の利益を得る方針であった。晩年回顧したように「正直と熱心とを唯一の武器として日夜奮励努力」した生涯であった。

昭和九年、長次郎は満七十七歳となり喜寿を迎えた。妻ツルは七十歳で、さらに結婚五十年目の金婚式にあたっていた。

この三重の喜びを迎えて、従業員全員に自筆の軸物と金封を贈った。明治十年五月二十八日

に生家を出てから五十八年目であった。

昭和十一年七月十五日、この日は特に暑い日であった。長次郎は定例重役会に出席し、終わって帰宅したところで意識を失った。脳出血であった。二日後帰らぬ人となった。享年八十歳。

七月二十日、四天王寺にて杜葬が行われ、会葬者は数千人に及んだ。

十二、松山大学の略年表

最後に松山商高から現在の松山大学までの略年表を記しておきたい。

松山高等商業学校
大正12年3月 財団法人松山高等商業学校第一回理事会、校長に加藤彰廉が就任
4月 第一回入学式、北予中学校舎を借り授業開始
13年4月 校舎落成
昭和11年7月 新田長次郎死去
19年2月 福知山高商を合併
松山経済専門学校
昭和19年4月 松山経済専門学校と改称
24年2月 松山商科大学の設置認可



現在の松山大学

松山商科大学
昭和24年4月 第一回入学式
26年3月 財団法人から学校法人に改組
27年4月 短期大学部開学式
平成元年1月 松山大学の設置認可
松山大学・松山短期大学
平成元年4月 第一回入学式

〈参考文献〉

至誠 評伝・新田長次郎
西尾典祐 中日出版社
松山商大物語 松山商科大学
松山商科大学六十年史(写真編)
松山商科大学
松山商科大学六十年史(資料編)
松山商科大学
県民メモリアルホール人物探訪
愛媛県生涯学習センター